生徒の実態に応じた指導を可能にする校内研修の在り方
－　小グループで日常的に行う授業研究を通して　－

佐藤　彩子
教育実践高度化専攻
学校運営コース

１　テーマ設定の理由

近年，教員の経験年数の均衡は崩れており，これまでのような先輩教員から若手へ知識・技能の伝承は期待できない現状となっている。現任校でも，半数近くが 20 代であり経験の浅い教員が多く，日々の業務に時間を取られ，授業などの研修を行っている余裕がない。中堅・ベテラン教員についても，自分たちが任されている仕事の量が多く，若手を育てるという意識にまで至らなかったり，育てたいという意識はあるものの，指導助言の仕方が分からなかったりする教員が多く，ＯＪＴがうまく機能していないと感じる。以上のように，授業研究を含めた様々な業務が教員個人の力量に委ねられており，学校全体として研修に熱心に取り組んでいるとは言えない状況である。

そこで，教員にとって一番多くの時間を割いている授業に焦点を当てて，校内研修の改善を進めていくことが必要だと考えた。授業準備や反省の時間に，小グループで日常的に行う形の授業研究を取り入れることで，困っていることについてアドバイスをもらったり，授業中の生徒の様子を観察してもらったりすることができるようになれば，改めて研修の時間や場を設定しなくても，教員の指導力向上につながる校内研修に改善することができるのではないかと考え，本主題を設定した。

２　研究の視点

本研究を進める上で，次のことを明らかにする。

(1) 授業研究を行う小グループの在り方や有効性を明らかにする。

(2) 授業研究を日常化するための在り方を明らかにする。

３　研究の内容

(1) 研究の構想

生徒の実態に応じた指導を実現する過程を（図１　研究の構想図）にまとめた。教員が，生徒の実態に応じることができる指導力を身に付けるためには，「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が必要である。しかし生徒の姿を捉えることは難しい。また今まで自分が行ってきた授業の型を見直すことにも抵抗がある。

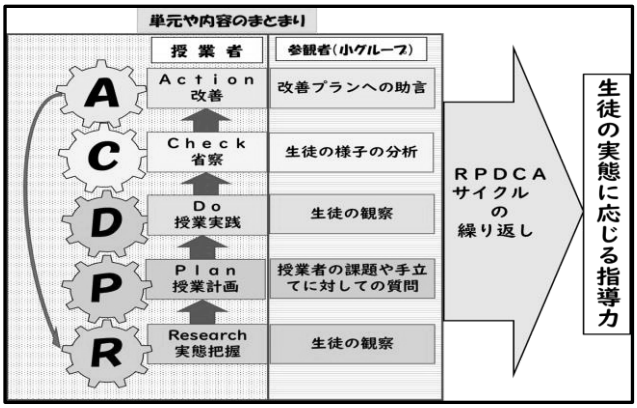

図１　研究の構想図

そこで，授業計画を立てたり実践したりする際に，定期的に他者の考えを取り入れることができるようにする。授業研究を行う小グループを作り，週一回時間割の中にグループで集まることのできる時間を設定する。年間を通じて定期的に集まることで，授業計画の際に他教科での生徒の様子

について助言をもらったり,授業参観をして生徒の様子を見取ったりすることができるようになる。

次に,ＲＰＤＣＡサイクルについてだが,今までのサイクルは一年間の大きな流れで考えていた。しかしそれでは，それぞれの活動が形骸化し，目の前にいる生徒に還元できないといった課題がある。それよりもまずは，単元をひとまとまりとして，R＝実態把握，P＝授業計画，D＝授業実践，C＝省察，A＝改善というサイクルを目に見える形で日常的に回していく。そうすることで，教員は改善すべき点が具体的に見えるようになり，実際に改善することができると考える。

４　研究の実際

(1) 授業研究の土壌作り（全体研修と組織作り）

まず，研究部の２人を中心に全体研修を行い，授業研究をどのように行うべきか，学習指導要領改訂の方向性に沿って再確認をした。この全体研修後，各教科部会にて「目指す生徒像」に向けた目標を立てた。スタートの段階で，全員が目指す生徒の姿について共有し，目標を立てたことで，目指すべきゴールが明確になった。

次に，学校長から本校の研修の進め方や質の向上についての考えを伺った。学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現を図ることはもちろんだが，つくば市教育大綱における「教えから学びへ」,「管理から自己決定」,「認知能力偏重から非認知能力の再認識」という一人一人の個性に応じた教育への転換，さらには「主体的・協働的・創造的な学び」を目指す「竹園スタイルの学び」の実現を図るような校内研修への改善が必要であると考えていることが分かった。

次に研究主任に聞き取りをした。つくば市は全小中学校が小中一貫教育を推し進めており，本校も隣接する二つの小学校と統一した研究テーマを作成している。三校でのやりとりの中で，以前からある「竹園スタイルの学び」について全職員でもう一度理解を深め，実現を図っていくことが必要であるという認識を共有しているということであった。

こうした本校の実態に沿った研修として，小グループで日常的に行う授業研究を提案し，生徒一人一人の個に応じた教育の実現のため，学校全体で取り組んでいけるように，管理職や研究主任との協力体制を築いた。

(2) 小グループでの授業研究

①　グループ編成

小グループ（３～４人）を作るにあたって，時間割上に打ち合わせをする時間を配置して，確実に授業研究を行えるよう配慮した。さらに，小グループメンバーは異年齢・異学年にして，メンター・メンティー方式での授業研究が成り立つようにした。大グループごとに５名のリーダーを立て，小グループの授業研究を進める中心的メンバーとなるようにした。

②　小グループによる授業研究の実際

研修室などにメンバーで集まって，指導案の検討を行ったり，授業参観をした際の生徒の様子を共有したりする場合と，この時間を使ってメンバーで授業参観をする場合の大きく二つのパターンができた。それぞれのグループが授業研究の時間に何をしたのか，今後の予定などについては，研修室の掲示板で確認ができるようにした。

(3) 授業研究の日常化に向けての取り組み

①　大グループリーダー会の開催

前述した授業研究のリーダーを集めて，進捗状況を確認したり課題を共有したりする機会を月に

一度設けた。リーダー会では，「教科ごとに立てた目標のブラッシュアップが必要である。」，「授業参観をする際の参観のポイントをどこに置くか。」などが話題に上った。リーダー会で出た要望や提案について吟味し，改善すべき点は改善しながら授業研究を進めている。

② 同年代グループ（縦割り研修）の開催

授業研究グループは，若手，中堅，ベテランで構成されるグループである。そこに，各グループの若手のみ，中堅のみ，ベテランのみを取り出した会を同世代グループ会として立ち上げた。小グループごとの進捗状況や質の差を補完するためである。また，授業研究グループは異年齢グループであるため，それぞれの年代ごとに担っている役割が違うので，同年代で定期的に集まることで，自分たちの年代の役割を確認する場を作るというねらいもある。同世代であるということで，学校の中で担っている役割が重なっていたり，悩んでいることにも共通点があったりするので，それらを共有し今後の見通しを立てることができた場となった。学年会や会議の場では話しづらいことも気軽に意見を交流することができた。同世代グループ会の開催は，率直な意見を交わす場の設定としては成果があったが，授業研究の場としての活用については，今後の課題としたい。

③ 全体授業研究の開催

全体授業研究は６月，９月，11 月，１月の４回実施した。１回目は計画訪問と重ねて，２回目，３回目は校内の教員のみで実施した。時間の確保や，授業参観のポイントをどうするかなどについて課題が出たので，少しずつ改善を図り，３回目では交換日記的授業参観シートを開発して活用した。このシートを使うことで，参観者は授業での生徒の様子を中心に観察し，授業後にそれらをグループで分析して改善点を探るという形を取ることができるようになった。

５ 研究の分析

(1) 全体授業研究参観数の推移の分析

第２回，第３回全体授業研究の参観数を比較すると、第２回目では平均参観数は 1.9 回であったが，第３回目では 2.4 回に増えており，授業参観をする教員が増加していることが分かる。また，参観しての感想についても、第２回目と第３回目を比較すると，生徒の様子に着目しながら授業参観する必要性を感じている教員が増えていることが分かる。

(2) 抽出教員への聞き取り調査による分析

無作為に抽出したベテラン，中堅，若手３名にインタビューをした。３名ともメンバーの授業参観をしたり，各クラスでの配慮を要する生徒について話し合ったりしており，小グループの時間を有効活用することができていることが分かった。その中で，特に若手教員については，今後の授業の改善案を考えたり，メンバーの授業を参観して自分の授業を振り返ったりといった授業改善への動きが見られることが分かった。一方で，他教員との連携が図れなかったことや，日常的に行ったことで，授業参観をする時間の確保が難しかったと感じていることが分かった。

(3) 生徒へのアンケートによる分析

抽出した生徒（９年生徒 177 名）に対し，夏休み前の７月と１２月上旬の２回にわたりアンケートを実施した。授業の分かりやすさや面白さについては，ポイントの上昇が見られ，授業の分かりやすさ，面白さの点では，生徒の実態に応じることができるようになっていると言える。

(4) 教員へのアンケートによる分析

教員にアンケートを実施した。（１２月初旬）昨年度と比較して，今年度，80 パーセント近くの

教員が授業を参観した数，参観された数ともに増えていることが分かる。同じように80%近くの教員が，他学年の教員と話す機会が増えたと解答しており，昨年度末挙げられていた，学年をまたぐ教員同士の連携が少ないという課題を改善することができたといえる。

今年度，授業を参観する・されることを促すことはできたが，参観した授業をどのように検討するかについては吟味することができなかった。教科部会での検討を経て参観を行うような形を取り入れていくことも検討していきたい。

６　研究の成果と課題

(1) 成果

① 小グループで授業研究を行うことについて

成果の１点目は，小グループであることで，気軽に困っていることを相談したり意見を述べたりすることができた点である。特に若手にとって，授業の進め方や課題の作り方などの基本的なことについても助言をもらえたことは，授業を改善していく上で意義があったことであると言える。２点目は，教科や学年に関わらず，生徒の様子から授業分析をする機会を提供できた点である。授業参観を通して授業者が把握しきれない，生徒の様子や変容を丁寧に観察してもらうことができ，学習課題や手立ての有効性について客観的に分析することができた。小グループで行うことは，以前のように全体でのみ研修を行っていた頃より，教員同士が互いに授業を参観しながら授業研究を進めることができており，校内研修改善の一助になっていると言える。

② 日常的に授業研究を行うことについて

成果の１点目は，研修時間の確保である。アンケートにおいて，多くの教員が昨年度と比べ授業参観をする・される数が増えたと答えており，授業参観をする機会が増えたことは成果と言える。さらに，交換日記的授業参観シートを活用したことで，授業計画→授業実践→省察→改善というサイクルを，生徒の姿を中心に置いて考えることができるグループが現れた。日常的に授業研究を進めることで，生徒の変容を見取りやすくなり，生徒の実態に応じた指導へ工夫改善しようとする意欲を高めることができたと言える。

(2) 課題

小グループで授業研究を進めると，グループごとに進捗や質の差が出るので，各メンバーの役割を明確に位置付けることや，小グループでの研修の時間と全体での共有の時間を組み合わせて進めることが必要だと考える。また授業参観を中心とした授業研究を進めてきたが，生徒の変容の見取り方，改善策の講じ方など，どのように授業を参観するかについて，検討する必要があると考える。小グループでの授業研究を教科部会や全体研修などと組み合わせて機能させることで，どの教員も生徒の実態に応じた指導の工夫改善を進めることができるようにすることを今後の課題としたい。また全体授業研究期間を節目としながら，小グループの授業研究を発展的に進めることができるような見通しが必要である。年度当初にスケジュールを可視化し，全教員が見通しを持って研究を進められることを，今後の運営上の課題としたい。

７　主な参考文献

澤井陽介　『授業の見方』　2017　東洋館出版

鹿毛雅治　藤本和久　『授業研究を創る』　2017　教育出版